



TITLE:

我國に於ける預金通貨統計の發達

AUTHOR(S):

中谷, 實

CITATION:

中谷, 實. 我國に於ける預金通貨統計の發達. 經濟論叢 1939, 48(1): 178-192

ISSUE DATE:

1939-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131191>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號一第 卷(十四第

月一年四十和昭

經濟論叢 每月一日發行
第四十八卷第一號 昭和十四年一月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

(禁轉載)

目次

作田莊一博士肖像……………	卷頭
作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……………	一
日本的學問の文化史的意義及び基本的諸典型……………	文學博士 米田庄太郎……………三
東亞民族の形成……………	文學博士 高田保馬……………六
日本經濟史研究の發展……………	經濟學博士 本庄榮治郎……………五
理論學としての日本經濟學……………	經濟學博士 谷口吉彦……………四
産業組合の耕地管理……………	經濟學博士 八木芳之助……………三
印度に於ける國民的産業能率の遲滯性に就て……………	經濟學士 大塚一朗……………二六
「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……………	經濟學士 中川與之助……………二六

資本主義と支那事變……………	經濟學士 柴田 敬……………	一四三
明治時代農村手工業の消長……………	經濟學士 堀江保藏……………	一六三
我國に於ける預金通貨統計の發達……………	經濟學士 中谷 實……………	一六九
保險思想の發展……………	經濟學士 佐波宣平……………	一七五
歷史學派に於ける國民經濟の概念……………	經濟學士 白杉庄一郎……………	二二一
日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……………	經濟學博士 石川興二……………	二二七
國事資金法の提案……………	經濟學博士 小島昌太郎……………	二四九
農山漁村財政の五箇年記錄……………	經濟學博士 汐見三郎……………	二六九
支那の社會成層……………	法學博士 財部靜治……………	二八八

我國に於ける預金通貨統計の發達

中 谷 實

一 序 言

一國の信用經濟が發達するに伴ひて通貨の構成も亦自ら變化し、所謂預金通貨の流通する領域の擴大せられる事は言ふを俟たざる所である。而も通貨の數量が増大又は減少する際には、諸種の通貨に比して最も弾力性に富める預金通貨が先づ第一に其の徵候を表はす可き事が考へられる。勿論通貨の膨脹及び收縮は、其の時々¹⁾に於ける原因によつて、或は現金通貨の増減が先づ表はれる時もあり又は預金通貨の増減が先きに表はれる事もあるが、少く共現金通貨よりも預金通貨の方がより敏感に其の徵候を示すものと考へられるのである。

現下の我が國は言ふ迄もなく戰時經濟體制を採りつゝあり、已に滿洲事變以後に於て準戰時體制を採りつゝあつたとも言はれるのであるが、戰時經濟體制の下に於ては、財政の膨脹と通貨の増大と而して物價の騰貴とが最も特徴的な現象と言はれる。我國に於ても準戰時體制に入つてより、財政の膨脹に伴ひてインフレーションの脅威が論議せられたのであるが、其の際一方には大戰後の獨逸に於けるが如き第三期的インフレーションへ迄進行せざるやの危惧の念を抱くものも存してゐた。勿論當時のインフレーションは小島教授の指摘せられしが如くに預金通貨によるインフレーションに止まり、それが幸にも現金通貨のインフレーションに迄進展しなかつたの

1) 小島昌太郎；金融機構論，附錄第一章。

であるが、若し政府にして公債の増發に細心の注意を怠り且つ日銀の操作宜しきを得なかつたならば、或は恐れられたるが如き事態の發生を見るに至つたかも知れぬであらう。殊に一昨年七月支那事變が勃發して純戰時經濟體制に入り次いで長期戰體制に入るに及んでは、財政の膨脹は愈々著しく、事變費たる臨時軍事費特別會計のみについて見ても、十二年度の二十五億餘圓の外に十三年度には四十八億五千萬圓の豫算が追加可決せられ、昨年度の分のみについても其の中四十四億五千萬圓が公債支辨となつてゐる。斯くて發行せられたる公債が日本銀行に於て引受けらるれば政府の資金は日本銀行に於ける政府預金の増加として成立し、政府は此の預金に基きて小切手による支拂をする。而も支拂を受けたる企業は此れを自己の取引銀行に預入れる事によつて銀行預金は膨脹し、企業家は此れに基きて諸種の支拂をなすのであるが、其中俸給勞賃の如くに現金通貨による支拂よりも預金通貨による支拂の方が遙かに多額なるは想像に難くない。

斯くて戰時經濟體制下に於ては財政の膨脹が通貨の増大特に預金通貨の増大を齎らし、兎もすれば物價の騰貴を誘起するに至るのである。而して物價の騰貴は國際收支の惡化・國民生活の不安を惹起するのみならず財政計畫の破綻を招來して戰爭遂行を不可能ならしめるが故に、一方に於て節約貯蓄の獎勵と共に他方には物價の監視又は公定すら行はれるに至るのであるが、此の際物價の方面のみに着眼して通貨の狀態を顧みざる時には必ずや政策の破綻を來す事となるであらう。

我國に於ては、物價水準に關する統計は卸賣物價に就ても消費物價に就ても已に早く明治の初年より相當の整備を示し、又通貨に關しても紙幣・日本銀行兌換券・本位貨及び補助貨等の現金通貨の統計は相當早くより正確に

近き數字を求め得るのである。然るに預金通貨³⁾に關しては其の統計的研究が最近に至る迄顧みられず、最近預金通貨の重要性が認めらるゝに至つて初めて其の統計的研究に着手せられし有様である。勿論銀行預金に關する統計並びに手形交換高に關する統計は不完全ながらも明治初年より此れを求め得ない譯ではないが、此等は共に通貨の統計としてではなく夫々の金融機關の統計として發表せられ、各金融機關が如何程の資金を集め如何なる内容を有するや等を示さんが爲めのものであつた。此れ全く我國の信用經濟が最近に至りて一層急激なる發展を示した事に基くものではあるが、特に現下の戰時經濟體制下に於て資金の大半が預金通貨の形に於て流通する事實より見ても、預金通貨の統計的研究が如何に重要なかは今更贅言を要さぬ處である。

然らば預金通貨の統計的研究には如何なる點が問題となるか。又諸外國に於ては已に如何なる研究がなされてゐるか。此等について簡單なる考察を加へたる後、我國に於ける預金通貨の統計的研究の發達を述べ此れが考察を試みる事とする。

二 預金通貨の統計的研究に於ける問題の所在

預金通貨の統計的研究に於て先づ最初に問題となるのは何を以て預金通貨と見るかと言ふ事である。私は銀行其の他の金融機關に於ける要求拂預金を以て預金通貨と考へ、諸國の通説も亦銀行の要求拂預金を以て預金通貨と見做してゐるのであるが、然らざる見解を執る者も決して少くは無い。即ち或は小切手其のもの又は小切手と預金と合せたるものを以て預金通貨とし、又は銀行預金が支拂手段として働く間のみ此れを預金通貨とせられる

3) 金融事項參考書、明治財政史第十二卷等參照。

4) 拙著、預金通貨の研究、第六章參照、汐見三郎；統計學第九章參照。

のである。従つて要求拂預金のみを預金通貨と見る立場に於ては、預金通貨の數量は要求拂預金の平均殘高に當座貸越契約高の中顧客の未だ利用せざる額を加へたるものによつて之れを求む可く、預金通貨の流通速度は、一定期間(例へば一ケ年間)に振出されたる小切手の總額(嚴密に言へば振出されたる小切手が再び銀行に預入れられ又は現金に變へられる迄の間に於ける支拂取引の決濟額を加算せしもの)を右の要求拂預金の平均殘高を以て除したる高によつて與へられる。然るに小切手を以て預金通貨と見る場合には、預金通貨の數量並びに其の流通速度を統計的に求める事が困難にして、假りに一定期間に振出されたる小切手の總額をば預金通貨の數量とすれば、流通速度は一なるか又は精々振出されたる小切手が再び銀行に預入れられるか又は現金に變へられる迄の間に人手を轉々する回数としか考へざるを得ないのであつて、此の際、一定期間内に振出されたる小切手紙片の枚數及び紙片が人手を轉々する回数を以て、預金通貨の數量及び其の流通速度と見做す事は餘りにも無意義な事と言はねばならぬ。同様にして、小切手と預金とを合して預金通貨を考へ、又は銀行預金の中で小切手の振出されたる部分のみが預金通貨なりと見る立場に於ても、少く共預金通貨の統計的研究に際しては右と同様の結果に歸すのである。⁵⁾

然らば預金通貨の統計的研究に於ては何故に其の流通速度が無視せられ得ないか。或は預金通貨の統計が物價水準の變動との關聯に於て其の意義を認められるのであれば、流通速度の増減が結局數量の増減と同一の結果を持つ以上、⁶⁾預金通貨の流通速度を常に一と考へて小切手振出總額をば預金通貨の數量と見なしてもよいではないかと考へられるかも知れない。或は又小切手たる預金通貨は現金通貨と異りて人手を轉々するものでは無く、更

5) 拙著：新金融理論、45-47

6) M. W. Holtrop; "Die Umlaufgeschwindigkeit des Geldes", Beiträge zur Geldtheorie, v. Hayek, SS. 180-181.

に貨幣の規定に於て所謂休止中の貨幣を總て貨幣概念より除外せんとする主張も可成りに廣く行はれてゐる以上は、預金通貨に流通速度を認める必要がないではないかとも言はれ得るであらう。勿論右の如き考へ方にも一應の眞理は認め得られるのであつて、貨幣數量を取扱ふに際して流通速度を其の數量中に含ましめる場合も存するのであるが、他方には物價との關聯に於ても貨幣の流通速度を一の變數と取扱ふ者も多く、少く共統計的研究に於ては、現金通貨との關係に於ても預金通貨の流通速度を無視し得ないのである。即ち預金通貨の數量として、小切手振出總額を執る場合には、それは預金通貨によつて行はれたる取引の總額であつて現金通貨の數量と其の趣きを異にするのみならず、又此の場合には休止中の預金は預金通貨で有り得ないが爲めに、現金通貨にして個人の財布及び銀行の庫中にあるものを其の數量に含ましめる一般の通念と一致しないが故である。⁷⁾殊に預金通貨の統計的研究が重要視せられるに至つた原因の一半は、預金通貨の流通速度の變動が景氣の變動を反映せる事を實證せるバーゼス及びスナイダーの研究並びにミツチエルの斷言に歸せられねばならぬのであるから、此の點よりも預金通貨の流通速度は重要性を持ち得るのである。

次に預金通貨の統計的研究に於て問題となるのは、ケインズが所得預金の速度と營業預金の速度とを區別せしが如き、流通速度の構成變動の問題である。⁸⁾成程彼の言ふ如くに、倫敦の電車並に汽車による旅客運搬の速度が、汽車乗客の割合の増加の爲めに、電車又は汽車の速度に何らの變化がないに拘はらず變化すると云ふ事は、眞の速度を表はすに不充分なものであるが、現今の統計資料を以てしては其處迄の研究は事實不可能に近く、精々合衆國其他に於て總貨幣數量(現金と預金との和)と國民所得總額との對比が行はれてゐるに過ぎない。⁹⁾然らば

- 7) 例へば Hayek: *Preise und Produktion* (拙著; 新金融理論、第二章參照。
8) 拙著; 預金通貨の研究 187-188頁。——; 新金融理論 54-55頁。
9) W. R. Burgess; "Velocity of Bankdeposits," *Quarterly Publication of the American Statistical Association*, June 1923.
C. Snyder; *Business Cycles and Business Measurements*, 1927.

預金通貨に關しては現今如何なる統計的研究がなされてゐるか。先づ諸外國に於ける研究を一覽したる後我國における研究を考察しやう。

三 諸外國に於ける預金通貨の統計的研究

預金通貨の統計的研究として挙げらる可き最初の業績は、ピエール・デ・ゼツサール⁽¹²⁾が獨逸・佛蘭西・白耳義等の發券銀行について當座預金の數量並びに其の流通速度を測定せしものを挙げねばならぬ。即ち、彼は一ヶ年に銀行に預入れられた額と銀行が支拂ひたる額との平均を以て取引總額となし、平均預金殘高たる預金通貨の數量を以て此れを除し、以て預金通貨の流通速度を算定してゐるのである。然し乍ら其の價值は未だ言ふに足るものではなく、預金通貨の統計的研究は資料の最も完備せる合衆國に於て先づ其の發達を見たのである。

合衆國に於て、預金通貨の數量並びに其の流通速度に關して最初に輝かしき研究を遂げたるは、周知の如くフ

年次	預金通貨數量 十億弗	預金通貨流通速度
1896	2.68	36.2
1897	2.80	37.9
1898	3.19	39.8
1899	3.90	42.6
1900	4.40	37.5
1901	5.13	40.6
1902	5.43	40.9
1903	5.70	39.1
1904	5.80	40.2
1905	6.54	43.1
1906	6.84	46.8
1907	7.13	44.9
1908	6.60	45.5
1909	6.75	53.9

イツシャーであり、其の研究方法に關しては嘗て詳細に紹介批判⁽¹³⁾せしが故に茲では其の結論のみを擧げる事とする。即ち第一表に示すが如くであつて、預金通貨の數量に關しては其の中四ヶ年のみが實數であり他はすべて推算である。又彼が流通速度算定の基礎としてケンレイ教授より借り受けたる小切手による取引總額の數字は、小

W. C. Mitchell; Business Cycles. p. 125.

10) Keynes; A Treatise on Money, Vol. II p. 22.

11) Holtrop; a. a. O. S. 166.

12) Pierre des Essars; "La Vitesse de la Circulation de la Monnaie" Journal de la Société de Statistique de Paris, 1895.

切手振出總額ではなく各銀行に於ける小切手による預入總額であつて、振出小切手の中現金引出に用ひられたるものを含まざる事に注意せねばならぬのである。勿論當時には合衆國に於ても統計資料が甚だ不備にして、フィッシャーの努力は察するに餘りあるものであるが、其の後の研究に比すれば未だ尙實際より遠き事大なるものと言はねばならぬであらう。

次に特筆す可きは、一九一九年より一九二五年に亙り紐育外七ヶ市に於ける預金の數量及び流通速度の統計的研究を試みたるパーゼスの業績であるが、其の複雑なる操作及び各月の統計數値に關しては已に舊著¹⁴⁾に於て紹介したるが故に、此處では専ら前記二ヶ年のみに於ける流通速度のみを擧げる。即ち第二表の如くである。¹⁵⁾

市	銀行數	流通速度	
		1919	1925
New York	39	75.2	87.7
Albany	3	35.3	28.5
Buffalo	10	18.0	26.2
Rochester	3	18.4	30.3
Syracuse	6	10.8	8.9
Boston	11	36.6	38.3
Chicago	14	46.3	44.0
San Francisco	16	40.3	39.0

1) 及びミツチエルの研究に基き、合衆國の紐育及び此れを含む百四十一都市と全國とについて、預金の數量とそ

而して此の研究に於ても、小切手の振出總額は直接に此れを求め得なかつたのであり、個人勘定への拂戻額に關する聯邦準備銀行の統計に複雑なる加工を施せしものであるが、此れによつて、各都市中金融の中心地をなせるもの程其處における流通速度の大なる事を見取り得るのである。此の現象については種々なる解釋が附し得られるのであるが、ホルトロップによれば、金融の中心に位する都市程ケインズの所謂金融的流通が盛んであり、同時に預金者に於て貨幣市場へ投資するの便が大であるから平均預金殘高が少くなる事に基くものと言はれてゐる。¹⁶⁾殊にケインズが、スナイダ

13) 拙著：預金通貨の研究第五章第一節。

14) 同書：281-284頁。

15) Burges; *ibid.*

16) Holtrop; *a. a. O. S.* 185.

17) C. Snyder; *ibid.* p. 294.

W. C. Mitchell; *Business Cycles*, p. 126.

18) Keynes; *ibid.* Vol. II p. 36.

第 三 表

年	(1) 總交換高 Mill£	(2) 總預金高 Mill£ (年末)	(3) 當座預金		(4) 流通速度
			% of Total	金 額 Mill £	
1909	14.215	711	52	370	38
1913	17.336	836	52	435	40
1920	42.151	2012	62	1247	34
1921	36.717	2023	56	1133	32
1922	38.958	1885	56	1056	37
1923	38.429	1856	57	1058	36
1924	41.414	1843	56	1032	40
1925	42.302	1835	55	1009	42
1926	41.453	1878	54	1014	41
1927	43.261	1923	54	1038	42
1928	45.378	1982	53	1050	44
1929	46.495	1940	52	1009	46
1930	44.906	2004	50	1002	45
1931	37.300	1843	50	922	40

註 1930, 1931年度は Neisser の補足にかゝる。

の流通速度とを比較せる表によれば、特に農村よりも都市に於て流通速度の著しく大なる事が實證せられてゐるのである。即ち一九一九年より一九二五年に至る平均を見るに、紐育の流通速度は七七・一であり百四十一都市のそれは四一・四であるのに、全國を平均すれば二六・三に減少してゐるのであつて、金融活動が如何に都市に集中してゐるかを明瞭に物語つてゐるのである。

尙合衆國に於ける預金通貨の統計的研究としては、スナイダー及びミツチエルの研究と、ナイサーの補足的研究とを擧げねばならぬのであるが、其等は已に舊著に於て紹介したるが故に此處では省略する事とする。¹⁹⁾

然らば合衆國と共に小切手制度の最も發達せる英國に於ては預金通貨の統計的研究が如何なる状態にあるか。此の國に於ける代表的なる勞作としては、エディー及びウェーバーの研究を別とすれば専らケインズの研究²¹⁾を擧げねばならぬのであるが、此處にも資料の關係より必ずしも完全なるものが未だに求め難い事情にある。蓋し英國に於ては current accounts と deposit accounts とが常に合算して發表せられ居るが故に、先づ預金通貨の數量算定の上に於て我國よりも遙かに不便なる状態にあり、更に小切手

19) 拙著；預金通貨の研究 285-286頁參照。

20) L. D. Edie and D. Weaver; "Velocity of Bank Deposits in England" Journal of Political Economy, Vol. 38, No. 4 1930.

21) Keynes; ibid. pp. 31-33 H. Neisser; "Umlaufgeschwindigkeit der Bank-depositen", Handwörterbuch des Bankwesens, S. 569.

による取引總額を知るには、預金拂戻額の統計を缺く爲めに手形交換高を利用せねばならぬのであるが、此の國に於ける少數大銀行主義の爲めに、交換に出でざる所謂自行宛の小切手の額が甚だ大なるが故である。斯くてケインズは第三表の如き結果を發表してゐるのであるが、(1)欄を三五%増し(2)(3)欄を各々六%減少して、結局(4)欄を四三%増大する事により眞實に近き數値即ち六〇が得られるものと言ひ得るのである。

然らば信用經濟の發達が英國よりも遙かに遅れたる我國に於て、預金通貨の統計的研究は如何なる發達を示したか。項を改めて述べる事とする。

四 我國に於ける預金通貨の統計的研究

我國に於て預金通貨の統計的研究に着手せられたのは全く最近の事柄に屬し、昭和七年末に發表せられたる田中教授の研究²²⁾を以て其の嚆矢とする。此れ一つには我國に於ける信用經濟の發達が英米よりも遅れ居る事と資料の不備とに因るものではあるが、他方には我國に於ては從來一般に預金通貨に對して餘りにも關心が持たれなかつた事にもよるものと言はねばならぬ。然らば其の後五年限の間に此の問題の研究は如何なる經過を辿つてゐるか。先づ田中教授の研究に次で私が未熟なる研究を發表し²⁴⁾、更に大北教授の貴重なる研究あり²⁵⁾。再び田中教授の綿密なる再研究²⁶⁾を経て、遂に一昨秋東京手形交換所より「預金通貨の數量と其の回轉速度」が公にせられるに至つたのである。今此等の諸研究に於ける操作の詳細を此處に紹介する事は紙數の都合上此れを許され得ないのであるが、研究方法の異なる要點を、預金通貨の數量と其の流通速度とについて述べれば次の如くである。

22) Keynes; *ibid.* p. 31, Neisser; *a. a. O.*

23) 田中金司；預金の流通速度と支拂準備金(國民經濟雜誌第53卷第6號。)

24) 拙稿；貨幣と物價との相關々係に就て(經濟論叢昭和8年4月號。)

25) 大北文次郎；預金通貨の流通速度(商學論集第五卷。)

26) 田中金司、新庄博；銀行經營論 94-100頁。

第 四 表 預 金 通 貨 の 数 量

年	田中教授 (著 書)	大北教授	中 谷	東京手形交換所	
				當座貸越殘 を含まず	當座貸越殘 を含む
	千円	千円	千円	千円	千円
大正 1				230,981	313,241
2	386,048			233,547	325,470
3	390,678	390,687		237,252	331,734
4	459,715	459,715		280,754	385,068
5	578,476	578,476		408,894	529,541
6	737,610	787,609	818,114	595,003	750,029
7	1,023,167	1,023,167	1,231,809	875,663	1,093,608
8	1,207,052	1,027,052	1,424,232	760,445	1,125,910
9	1,157,519	1,157,518	1,368,883	882,564	1,357,601
10	1,188,701	1,188,701	1,371,416	811,045	1,223,228
11	1,336,095	1,336,094	1,503,702	760,482	1,210,482
12	1,470,739	1,470,738	1,634,109	798,572	1,248,557
13	1,399,894	1,399,893	1,567,713	792,705	1,268,283
14	1,415,650	1,415,650	1,607,453	792,444	1,281,364
15	1,439,117	1,439,116	1,609,164	835,615	1,368,445
昭和 2	1,440,786	1,440,786	1,612,789	744,217	1,238,204
3	1,353,526	1,353,526	1,527,277	739,060	1,151,306
4	1,261,704	1,261,703	1,423,748	695,447	1,094,585
5	1,147,059	1,147,059	1,280,651	641,402	1,054,757
6	1,020,016	1,020,015		577,322	1,004,611
7	985,580			548,643	977,875
8	1,097,904			642,876	1,097,128
9				681,259	1,158,590
10				715,123	1,214,783
11				743,909	1,286,959

先づ預金通貨の數量について見るに、其の理想的なる數値を求める爲めには、銀行（日本銀行を除く）に於ける當座預金の平均殘高の外に當座貸越限度中の未使用の額につき其の日々の平均殘高を求めねばならぬ。然し乍ら斯かる理想の數値は求め難く、特に當座貸越限度中の未使用殘高に關する統計資料がない。斯くて田中教授及び

大北教授は全國普通銀行における當座預金の上下期末現在高平均を執られ、私は此れに特殊銀行における平均殘高を加へたるものを、預金通貨の數量として掲げておいたが、東京手形交換所は、全國手形交換所加盟銀行當座預金の週月末殘高の年平均と此れに當座貸越殘高を加へたるものを

採用してゐるのである。蓋し同交換所に於ては、流通速度算定の際に全國手形交換高を採用せるが爲めと、銀行間の預金を除外せる點に於て右の方法を選ばれたのであるが、更に他の三者と異つて期末殘高を使用せられなかつたのは、期末には取引繁忙を極めて一時的に當座預金が増大する故、平常時を示す月央勘定に重點を置かれたが爲めである。²⁷⁾

尙當座貸越殘高は當座貸越限度中の未使用殘高と一致するものではないが、此れを援用せられた事は一の進歩と言はねばならぬ。斯くて大體として後の發表にかゝるもの程理想に近づきつゝある事は言ふ迄もなく、東京手形交換所の當座預金の週月末平均殘高の算出には少なからざる苦心の跡が窺はれるのである。然し乍ら尙其處にも若干の老慮を要するのであつて、先づ田中、大北兩教授については、特殊銀行の當座預金を考慮せられる事が望ましく、東京手形交換所の研究に關しても、流通速度の算定とは別に全銀行の預金通貨を求むる事と、月央には本來當座預金である可きものが金利の關係上特別當座預金となれる金額の相當に大なる事を考慮す可きではないか。即ち最も完全に近づきたる東京手形交換所の研究も尙若干改良の餘地を持つのであるが、而も此の方面の研究は著しき進歩をなせしものと云ふ可く、前述の如き諸外國に於ける研究に比して決して遜色あるものでは無い。今此れを纏めて表示すれば我國の預金通貨の數量は第四表の如くである。

次に預金通貨の流通速度を求めするには、先づ預金通貨たる當座預金並びに當座貸越契約を基礎として一ヶ年間に振出されたる小切手の總額を求め、此れを當座預金の平均殘高と當座貸越限度中の未使用殘高とを以て除さねばならぬ。而して小切手振出總額を求める爲めには、一ヶ年間に於ける當座預金の減少高に當座貸越貸出總額を加へたる數値を求めねばならぬが、當座預金の減少高及び貸越總額に關する統計は今日未だ利用す可きものが存

しない。斯くて、田中教授は、最初の論文に於ては預金の減少高の代りに當座預金の預入總額を援用せられたのであるが、²⁸⁾後の著書に於ては大北教授と共に、銀行局年報に發表せられたる、前期繰越高に當期増加高を加へたるものより當期末現在高を差引きたるものを以て、此れに充當せられ特に大北教授は此れに當座貸出高を加算せられてゐる。勿論此れとても正確なる意味に於ての當座預金減少高とは言ひ得ないのであるが、²⁹⁾諸外國に於ける研究に比してより勝れるものと言ひ得るであらう。尙當時私は田中教授とは別の方法で預金通貨の流通速度を測定せんと欲し、英米における例に倣ひて手形交換高より預金通貨による取引總額を求めんとした。此の方法は相當複雑なる手數を要し、手形交換高中より送金手形コール取引關係の手形等、通貨として使用せざれざりし部分を控除すると共に、所謂店內交換と稱せられて交換に出でざるもの、及び直接現金の取立に用ひられしものを差加へねばならぬ。斯くて手數の關係より見ても寧ろ前述の田中大北兩教授の方法が選ばる可きでないかと考へられるのであるが、偶々東京手形交換所も亦此の手形交換高に據つて小切手振出總額を算定してゐるのである。而して東京手形交換所の研究に就て注目す可きは、支拂小切手の總額のみに限らず、當座預金を基礎として振出されたる諸手形をも此れに加へたる點であり、斯かる調査は手形交換所の如き機關にして、初めて能く爲し得る所である。斯くて、流通速度の算定には、其の分子に當座預金の減少高を執る方法と、手形交換高に依る方法との二様の研究がなされてゐるが、其の方法の異なるに従つて、分毎に於て執る可き預金通貨の數量に關しても、全國の銀行を網羅するものと、全國の手形交換所加盟銀行に限るものとに分たれる事は言ふ迄もなき所であり、此の研究は益々理想に近づいたと云ふ事が出来るのである。今此の二様の方法によりて算定せられたる預金通貨の流

28) 田中金司；前掲論文17頁。

29) 大北氏論文228頁。

通速度を比較すれば第五表の如き結果が得られるのである。

第五表 預金通貨の流通速度

年	田中教授		大北氏	中谷	東京手形交換所	
	論文	著書			當座預金 のみにて 除す	當座預金 + 貸越高 にて除す
大正	1				55.72	41.08
	2	33.24			57.58	41.32
	3	31.61	39.25		52.10	37.26
	4	27.48	30.06	35.74	48.58	35.68
	5	37.28	37.93	45.78	56.39	43.54
	6	38.87	41.78	49.88	42.39	47.83
	7	50.86	51.78	61.60	55.42	54.35
	8	56.95	60.06	75.09	77.46	118.04
	9	57.74	58.21	71.60	72.25	95.74
	10	47.73	48.80	58.90	62.55	89.51
	11	45.53	45.23	55.74	64.26	90.98
	12	39.49	39.07	49.06	54.84	88.98
	13	43.66	44.28	54.13	64.05	103.39
	14	48.92	49.89	63.16	70.81	118.83
	15	53.50	54.10	66.70	77.03	121.55
昭和	2	46.44	45.52	56.37	63.13	91.30
	3	54.24	54.06	66.56	66.31	96.98
	4	53.90	53.83	66.36	68.90	95.57
	5	49.37	48.01	59.18	58.57	85.16
	6		51.10	63.20	70.43	94.21
	7		54.83		67.10	94.63
	8		58.41			101.40
	9					97.37
	10					93.86
	11					102.49
						59.24

より我國の信用經濟が急激に發展し來れる跡を充分に物語つてゐるのである。尙統計數字上、預金通貨の數量に關して言へば、より多數の銀行を包含せるものには當座貸越殘高が考慮されて居らず、當座貸越殘高が考慮せられてゐるものにはそれに含まれたる銀行の範圍が狭く、未だ充分なものとは言ひ得ないであらうし、又流通速度に關する數値に於ても其等の中で比較的數値の低いものが眞に近いのではないかと思はれるのであるが、我が國

即ち第四表及び第五表について我國の預金通貨の數量並びに其の流通速度を見るに、各研究が各々其の資料及び方法に相當の相異がある爲め其の數値に於ても必ずしも一致してゐないのであるが、大體の傾向として大正七年即ち歐洲大戰の末期

に於ける預金通貨の統計的研究が決して諸外國のそれに劣れるものでない事は確かに言ひ得られるのである。

殊に東京手形交換所の如き機關が右の如き預金通貨の數量及び流通速度等に關する統計的研究を試みる事となつたのは此の方面の研究の一層輝やかしき發展を約束するものであつて、同所は昨年十月に前述の如き綿密なる研究を發表してゐるのみならず、本年三月には更に昭和二年以來の各月につきて其の統計を發表し併せて其の季節的變動指數をも公表し、又六月には月末並に期末決濟資金の需要額を、日銀兌換券についてのみならず預金通貨についても其の推定を公にしてゐるのである。更に其の都度添加せられたる日銀兌換券數量、卸賣物價、工業生産量、株價・賃銀、金利並びに一般會計歲出等に關する統計は、一目にして財と貨幣との兩面の動きを看取し易からしめてゐるのであり、此の預金通貨の數量と流通速度とに關する統計的研究が永續せられたならば、我國の金融統計特に通貨統計を其の完備へと著しく接近せしめるものであり、正に劃期的の試みであると言はねばならぬであらう。

五 結 言

以上に於て私は、預金通貨の統計的研究が他種の統計的研究に劣らず重要なものであるに拘はらず、何故從來其の研究が發達しなかつたか、其の問題は如何なる點に歸つてゐるか、又我國より信用經濟の早く發達したる諸國に於ても此の研究が如何に困難であつたかを簡單に考察し、現在の我國に於ける研究の狀態を考察したのである。我國の信用經濟への發展も已に相當の歴史を有しながら、從來通貨統計と言へば殆んど専ら銀行券や鑄貨

等の所謂現金通貨の統計に限られて、預金通貨の統計の如きは殆んど顧みられなかつたのであるが、其の責の一端は資料の不備にあり、資料の不備は當局を初め金融機關及び一般社會に於て預金通貨に對する關心の薄かつたが爲めであらう。然るに此處數年の間に預金通貨特に其の統計的研究に關心を持たれる様になつたのは誠に慶賀す可き現象であり、殊に東京手形交換所の如き機關に於て此れが研究を企てられた事は、或は戰時經濟體制の要求の一つの現はれであるかも知れないが、此れによつて從來忘れられてゐた通貨統計の一大缺陷が埋められる事となるのである。又其の實益については今更言を弄する必要もないが、例へば政府の資金撒布に基いて民間の預金通貨の膨脹は如何程となるか、又諸種の經濟統制は商取引に如何なる壓迫を加へたか――從つて預金通貨の流通速度を如何程減少せしめたか等の如きも、精密なる預金通貨の統計が備はつてこそ初めて此れを察知し得るのである。經濟が長期建設の過程にあり益々計畫經濟的傾向が進むとすれば、各種の統計的研究が其の重要さを益す事は言ふ迄もない所であるが、別けても單に物の經濟のみが重要視せられた時期から、物の經濟と並んで貨幣の經濟が必要となる時期に進めば、通貨統計は益々其の重要さを益すものと云はねばならぬ。更に、歐洲大戰後の實情について見ても、惡性インフレーションは徐々に一歩々と進行するものではなく、或る一定の點迄は隠されてゐたものが、何らかの偶發事を契機として急天直下奈落に陥るのを例とするものであるから、單に現金通貨の増減のみならず、預金通貨の數量及び流通速度に絶えざる警戒の眼を着け置くことは最も重要な事柄と言はねばならぬのである。幸にして我國は昨年の初以來相當健全なる通貨狀態を維持して來たのであるが、最近に至つて漸く預金通貨の膨脹が目立つて來たと傳へられる。³⁰⁾此の統計的研究の意義も亦一層強く認識せられるであらう。

30)

預金通貨の數量	
13年10月	1,339,000,000円
前月との比較	+ 83.
前年同月との比較	+ 400.

回轉總量	
8,621,000,000円	
+ 700	
+ 1270	
(朝日新聞、13年11月29日)	